
普通とは違う転生者

見知らぬ英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通とは違う転生者

【Nコード】

N1878Y

【作者名】

見知らぬ英雄

【あらすじ】

何故か知らないけど英雄として転生する事になった無駄に頭の回転が早い主人公が送る物語

第一話 いきなりの宣告

見知らぬ場所に俺は居た

「此処何処だ？何も見えない」

そう思うのはしょうがないだろう何故なら周りは

前——白＋土下座しているオッサン

後——白

右——白

左——白

辺り一面真っ白な空間にオッサンが土下座してるってかなりシユールだよな。

「なあオッサン何で土下座してんの？」

踏みつぶしたくなるんだけど、問題ないよね　せーの「止めてくれ！」「ちえー

「そんであなた誰よ、俺あんたみたいな知り合いはいないんだけど、あと此処何処よ」

「此処は天国と地獄の狭間じゃよ、因みに俺は神様じゃからな」

なるほどなるほど此処は天国と地獄の狭間ね……ん？ということは俺は死んだのか

「死んだとはちと違うかのう、儂がお主に用が有ったから此処に呼んだんじゃよ、幸いにも此処なら誰にも聞かれずに話す事が出来るからのう」

何で俺が思った事が分かるんだ？……ああ、読心術か納得
「お主頭の回転が早いのを、その通りじゃよ」

「頭の回転の早さだけが取り柄ですから、それで俺を此処に呼んだ理由は」

これが俺が今一番聞きたかったこと、まあとりあえず予想は出来るけどあれは不慮の事故（神様のミス）じゃない限り出来ない筈ならなんだ（現在神様に心を読まれないように心を閉ざしてます）

「お主、転生に興味はあるかの？」

「は？」

この言葉に俺は耳を疑った俺はまだ死んでない筈なのに何故転生なぞしなければならんだ（ちなみにかなり動揺してるため神様に心を読まれまくっています）

「ああ、その事じゃがの、今のお主は死にかけている状態だったの

じゃがこのまま死なせてしまうのは惜しくてのお主の精神を此処まで連れてきたつちゅーわけじゃてか何故転生の事をそんな詳しく知ってるんじゃ？」

「ああ、その事が、いやな俺の世界に二次創作小説って物が有つてな、まあネット小説とも言うんだがその定番みたいなもんなんだよ、例えばアニメのキャラクターのチート能力貰って転生先で無双とかな、それで俺はどの世界に転生するんだ」

「本当にお主は頭の回転が早いのを、だがのう本来ならお主の言っている通りになるんじやがお主はかなり特殊でのう特定の世界以外に転生する事が出来なくなったのじやよ」

？

「どっぴいっことだっ」

「率直に言おうお主には英雄になってFate/Zeroの世界に転生してもらっ」

「はい？」

第一話 いきなりの宣告（後書き）

この小説を呼んでくれてありがとうございます。ごぞいませ。

主人公のオリジナル宝具を募集しています。

第二話 自らの力

「いやいやちよつと待て!!何で俺が英雄となつて転生しなきゃならんのだというよりFate/Zeroって何だ!!」

「お主Fate知らないの?結構有名な気がするのじゃが」

「残念ながらしらん、どのような作品か知りたいからキャラクターの名前と世界観やら設定を教えろ」

知らないのはこの際しようがないとして作品の内容を聞くことに決めた

「ふむ、そうじゃの主な内容としては聖杯と呼ばれる人々の願いを叶える願望器を廻りマスターと呼ばれる人間がサーヴァントと呼ばれる英雄の霊すなわち英霊を操り戦う物語じゃ、キャラクターの説明じゃが.....」

説明はこの後三時間にも及んだ、Wikipediaより長い説明だったと言っておこう

「それでどのクラスで召還されるんだ」

「それはお主の好きにして良いぞイレギュラークラスでもOKじゃ」

それを聞いて安心した、なら俺が選ぶクラスは

「バーサーカーだ」

「?なぜじゃ?わざわざバーサーカークラスにしたんじゃ」

「簡単なことだ、間桐雁夜と間桐桜といったかあいつらが可哀想すぎる、どうせ原作ブレイクしても問題ないんだろう?第一あんたから聞いた話だと間桐のじじいは間桐雁夜が死ぬことを前提としてるじゃないかそこが気に入らねえ」

「お主は優しいのうそれで肝心の能力はどうする」

どうするかなーアニメの能力は嫌なんだよなー努力を積んで得た他人の能力を何の努力もしないで手に入れるみたいで嫌なんだよな、
.....よし思いついた

「じゃあ俺が考えた能力でもOK?」

「OK、OK問題ないぞ」

「そんじゃ 掌握魔法で念の為無限の魔力を」

「それがお主の能力か無限の魔力は良くあるからオリジナルは掌握魔法かの、それでそれはどのような魔法なのか教えてくれんかの? どのような魔法だか分からなければあげる事は出来んのじゃよ」

そんくらい察しろよと思ったが説明しなきゃ変な風になってしまい

そつだからきちんと説明しなくては

「掌握魔法つてのは、その名の通り全ての物を掌握してそれを操る魔法でその気になれば宇宙も掌握可能」

「チートじゃのう、まあいい、ほれ渡したぞ試してみるがいい」

そつ神様が言うつと目の前に見るからに硬そつな物質が出てきた、これを壊せつてかよし試しに殴つてみよう、せーの、フン！！「ドガアアアン」あれ？

「掌握魔法使わないで壊せたんだけど」

「お主どんな握力しとるんじゃ、流石の儂も驚いたぞ」

冷や汗をかきながら神様が言つていた

「これつて本来ならどの位の強度なの？俺の握力つて常人の倍くらいだぜ」流石にここまで派手に壊れたから流石にビビつた

「本来なら天界にいる大天使や魔界にいる魔王の全力攻撃一回でも罅が入るくらいなのに何故かお主は一撃で壊してくれたからつ、ちとお主の体を調べてもいいかの？」

「構わないよ」

神様が俺の事を調べ始めた

・・・・・・・・一分後

「お主本当に人間か」

この言葉には流石に驚いた

第二話 自らの力（後書き）

この小説を呼んでくれてありがとうございます。オリジナル宝具を募集しているので主人公に使って欲しい神話の武器がある場合教えてください

第三話 転生

「とりあえず聞いておくけど何でそんな事言い出したんだ」

「お主固有スキルを何故か持っているのじゃよ」

「まじで」

「うんまじでそれと固有スキルの名前は防御貫通といって鎧や岩石等の硬い防御を無視して内側にダメージを与える事ができる」

「ということはつまり」

「俺に鎧の類は効かないと」

「そうなるのう、あと宝具はどうする今決めるかのう、それと無限の魔力はもうあげたからの」

「宝具はその英霊の特徴を具現化したようなものなのだろうなら時代の流れに任せるさ、それじゃあ掌握魔法の練習したいからさっきの岩石また出してくれ」

「あい分かったサタン、ガブリエル出てくるがいい」

そう神様が言うつと空間に亀裂が入りそこから二人が入ってきた、ん？サタン？ガブリエル？

「……………つてなんで魔王と大天使が来てんだよ！！俺は岩石出せつただろだれが魔王と大天使だせつて言ったよ！！」

俺は神様の胸ぐらを掴んで問い詰めた

「これもお主の掌握魔法を把握するためじゃよ、お主の考えている能力と違う場合があるじゃろその為のサタンとガブリエルじゃ」

この言葉で俺は頭を抱えた、貰った力を試すためだけに魔王と大天使呼び出すか普通

「お前さん面白い能力貰ったんだってだったら完全に把握しとかないとな、あとお前さん強いんだろだったら一回やり合わなきゃ損だろ」

とサタンが言って

「すみません、私は余り乗り気では無いのですが先生の頼みですの
で」

ああ、ガブリエルが優しい、腹を括るか

「んじゃいきますか、神様合図頼む」

「うむ、では始め！」

「先手必勝！魔王ナツクル！」

いやそれ唯の殴りじゃん、そう思いながら手を合わせ掌握魔法を使用した

「『宇宙掌握、展開』」

そう言うと目の前に真っ黒な空間が出来始めた

「んな！まさか！」

とサタンが驚いている

『ブラックホール解放！！』

目の前の黒い空間が消え代わりに黒い渦、ブラックホールが出てきた、そのブラックホールがサタンを呑み込んだ

「おいおいまじかよ俺やガブリエルじゃなかったら確実にお陀仏だぞ、流石の俺でもこれ以上はヤバいな存在が消えちまうぜ」

中からサタンが出てきたが見るからに満身創痍だ

「サタン様がこうも簡単にやられては私では勝てる見込みがありませんね、掌握魔法でしたかあなたの思っている通りでしたか？」

「ああ、完璧だと思うあと試したいことがあるんだが構わないか」

「ええ、構いませんよ神様もよろしいですよね？」

「うむ構わんよ」

許可は得た、俺が試したいことは他の英霊の宝具を掌握魔法で出せるかどうかである。これが出きると出来ないと天と地の差がある他の英霊の宝具を使えるかどうかで便利さが段違いなのである。出す宝具は神様から聞いたセイバーエクスカリバーの約束された勝利の剣である、掌握魔法の発動の合図である手を合わせてから

『宝具掌握』

この言葉と共に体から膨大な魔力が放出した。

『具現化』

その手には剣が握られていた。出すことは成功したようだ、だが問題は真名開放が出来るかどうかだ

『真名開放、エクスカリバー約束された勝利の剣!!!』

そう言っただけ振りかざしたら真名開放も成功した

「神様、エクスカリバーの威力ってこれで合ってる？」

「うむ、存分に発揮しておるわい」

「どうやら威力も完全に再現できたようだ

「じゃあそろそろ俺を送ってくれ」

「相分かったお主はセイバーと同じ時代に送るからなサタンとガブリエルも一言言っただけやいなさい」

「分かった（分かりました）」

「お前さんの掌握魔法面白かったぜ、そんなお前に俺からプレゼントだ受け取りな」

「私も見てて楽しかったですよ、ですから私もあなたにプレゼントです受け取ってください」

そう言うとサタンとガブリエルの両手から光が出てきて、俺にその光を浴びせてきた

「これが俺と」

「私のプレゼントです」

初めはサタンとガブリエルから何を貰ったか分からなかったただけで直ぐに貰ったものが何か分かった

「これはまさか」

「そうそのまさかだこの俺、悪魔を統べる魔王サタンの悪魔の力と」
「この私天使を統べる大天使ガブリエルの天使の力を」

「お前あなたにやった（差し上げました）勿論あげた力は半分にも満たない程度だが（ですが）受け取れ（受け取って下さい）」

サタンとガブリエルから天使と悪魔その両方の力を受け取った

「二人ともありがとうな、俺に天使と悪魔の力をくれて、そろそろいくよ、じゃーな」

俺がそう言っつて神様がさっきから出してきていた門に入ろうとした、そしたら

「あなたの名前はなんというのですか！」

とガブリエルが聞いてきた、あ！、言い忘れていた前の世界での俺の名前は

「俺の名は天笠昴だ改めてまたな！！神様、サタン、そしてガブリエル！」

手を振りながら俺は門をくぐり転生した
その後の神様達は

「……………あ!？」

「どうしたんだ、オーデイン」

「そうですよ神様、何かにミスしたような顔して」

「Fateの世界に転生のは確定なんだけど、英雄になるためにセイバーの時代に送ろうと思ったなら間違えちゃった……………テヘ

「

「何やってんだ（ですか）！！この馬鹿神がああ！！！」

ドゴオオオン！！

「痛ああ！！！」

時空の狭間に一人の神の叫び声が木霊した

第三話 転生（後書き）

オリジナル宝具募集中です

第四話 バーサーカー

side三人称

間桐家の虫蔵の底で間桐雁夜はサーヴァントの召還を行っていた、ステータスの底上げを行う為に狂化の呪文を追加で行いバーサーカークラスを召還しようとしている

「汝三代の言霊を纏う七天」

この詠唱中にも間桐雁夜の体に巣くう刻印虫に蝕んでいる、何故このような事になっているかというと一年でサーヴァントを酷使出来るようにした結果である

「抑止の環より来たれ天秤の守り手よ」

召還の詠唱が終わりサーヴァントが現界する

sideバーサーカー

漸くこの時が来たか挨拶はしといた方がいいよな、その前にステータスを偽装しなきゃな、よし、偽装終了、さてと挨拶挨拶

「問おう、汝が俺のマスターか」

おお、驚いてる驚いてる、そりゃそうか理性が失われている筈のバーサーカーが流暢に喋ってんだもんな、続けるか

「喜べ、貴様の願いは聞き入れた」

一方的に話しかけてたら爺が近付いてきた

「カツカツカツ、バーサーカーが喋るとはのう」

この爺がとてつもなくウザイため早速だが俺の目標その一を開始する

「なんじゃその武器は！！儂に反抗する気か！これ雁夜よ早く小奴をなんとかせい」

ああ、やっぱりウザイ、もう消すかせーの

「『不死殺^{ロンギヌス}しの聖槍！！』」

俺の宝具の一つ不死殺しの聖槍を間桐の爺に当てた時爺はこの世から消え去った

「な………なにをしたんだバーサーカー」

「嫌な爺をこの世から消した、今度はお前に巣くう虫を何とかしてやろう、体の状態も元に戻してやる」

「そんなことが出来るのか！」

「ああ、出来るちょっと待ってる」

そう言うと俺は手を合わせて俺が今使える最強、掌握魔法を使用した

「『間桐雁夜の身体情報掌握、状態異常発見体内に体に害ある虫発見、消去、身体能力を全盛期の状態に復元』ふう、掌握魔法終了、終わったぞオマケで体を元の状態に戻してやったぞ感謝しろ」

何か雁夜が呆けた顔してるなーデコピン喰らわすかほいっとビシイイン！「痛ああ！何すんだよ！」

「反応ないからデコピンした、悪気があったわけじゃないそう言えばこの家に桜って子が居たよな」

「居るがどうした、バーサーカー」

「そいつも治してやるうか「本当か！」言っただろっ貴様の願いを聞き入れたと、まあ条件があるがな」

「条件とは何だ」

まあ、そう来るわな、絶対雁夜は俺の条件を飲むだろっな、破格すぎるし

「俺の条件はまず一つ遠坂時臣への復讐を諦めて貰うこと」「なっ！」
もう一つ俺への魔力供給を断てこのままだとお前死ぬぞ」

「あ、ああそつだのだがいいのか？」

「なにがだ」

「魔力供給を断つたらお前現界するために必要な魔力どうするんだ」

ああ、その事が

「その事だがな俺の魔力は無限にあるから一度現界してしまえばずつと現界する事が出来るんだよ（いざという時は神様の所に行ってパス繋いで貰うがな）」

「なら問題ないか、復讐の件だがあの爺が居なくなつた事だし桜も元に戻るんなら復讐はしない」

「交渉成立だな、桜ちゃんのところまで連れてつてくれ今日中に治す」

「そつだな、付いて来てくれ」

そう言うと雁夜が虫蔵から出てった、歩いて直ぐに桜ちゃんの部屋の前に着いたそのまま雁夜が部屋の扉を叩いた

コンコン

「はい、雁夜おじさんどうしたんですか？それと貴方は誰ですか？」

「ああ、桜ちゃんもう虫蔵に行かなくてもいいんだよ」

いきなりの雁夜の言葉にキョトンとした桜

「どういうことですか？それにどうやって体を元の状態に戻したんですか」

「雁夜」

「あ、ああ桜ちゃん彼が臍頭を殺してくれたんだよ、だから君はもう自由なんだ体も彼が元に戻してくれる」

「本当なんですか、本当にもうあの虫蔵に行かなくていいんですか？」

と桜が泣きながらそう言ってきたなんか子供の泣き顔は見たくない
なよし、撫でるか

「いきなり何するんですか!？」

「いや何か子供が泣いてるのを見るのはちょっとな、あと体の異常
はもう無くなってるから、とりあえず荷物を持って直ぐこの館から
でるぞ近くにあるアパート借りれば問題ないだろ一時間で終わらせ
る、俺は金目の物くすねてくる」

と言って俺は桜の部屋からでた。

「あの人何だったんでしょか」

「さあ？僕にもさっぱり」

取り残された二人は嵐が過ぎ去ったような感じに数分間襲われ直ぐ
準備を始めた

第四話 バーサーカー（後書き）

臓顕殺しちゃいました（笑）後悔はしていない

オリジナル宝具募集中です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1878y/>

普通とは違う転生者

2011年11月15日23時22分発行